

# 的外

みのる法律事務所便り  
第328号  
平成29年8月



みのる法律事務所  
弁護士 千田 實  
〒021-0853  
岩手県一関市字相去57番地5  
TEL: 0191-23-8960  
FAX: 0191-23-8950

みのる法律事務所 <http://www.minoru-law.com/> ✉ [minoru@minoru-law.com](mailto:minoru@minoru-law.com)



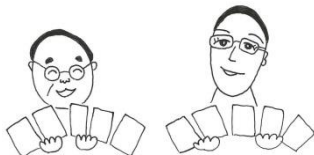
いなべん だべんく  
田舎弁護士の駄弁句 ③

## 小刻みに ジャブを繰り出す 駄文かな

還暦の頃に、「生涯に100冊の本を出す」という目標を掲げました。平成29年9月中には、頁数も内容も薄っぺらですが、達成できそうです。

ボクシングには「ジャブ」という言葉があります。前方の拳こぶしを小刻みに繰り出す軽い攻撃です。手の届きやすいところを軽く打つということのようです。構えず力まず軽く休みなく打ち続けることのように。

5分でも10分でも合間があれば、食卓でも、トイレでも、半行でも、1行でも書きました。いつの間にやら、100冊発行記念本が出せそうです。



## 田舎弁護士の駄弁句 ④

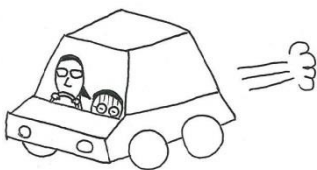
### バックから ギアを切り替え 前向きに



子どもの頃、お寺に同級生がいましたので夜でもお寺に遊びに行きました。寺に向かっているときはよかったです。寺を背にしての帰り道が恐かったのを覚えています。

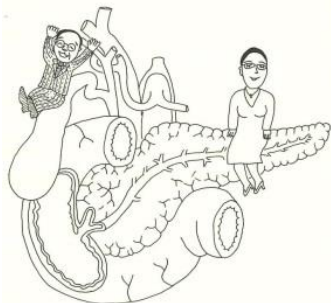
バックギアでは、車はスムーズに進められません。よく見えないし、スピードも出せません。ギアを切り替え前向きになるだけで思い切り進めます。

何事もネガティブ（消極的）にはならず、ポジティブ（積極的）に生きることが良さそうです。逃げないで、立ち向かう方が楽になります。「どうしよう、どうしよう」とくよくよ悩むより、「よし、やってみよう」、「受けて立つ」、「こちらから攻めてやる」と腹をくくった方が、気が楽になるし、結果も良いようです。



# 癌私感（その1）

## 或る患者の闘病記



その人は67才（昭和24年11月9日生）の主婦です。以下、頭文字を取って、「R子さん」と呼ぶことにします。R子さんは、平成29年3月18日に、岩手県一関市の文化会館で開催された相続問題の勉強会に夫と一緒に出席してくれました。

十数年ぶりにお会いしました。綺麗な方ですが、さすがに少し痩せて小さくなった気がしました。ですが、私のすぐそばまでやって来て、明るくにこやかに挨拶をしてくれました。

それから間もない4月初めになって、その娘さんより、「母が、2週間位前から食べると、胃に詰まる感じがして、食事が摂れなくなった」という話がありました。私は、すぐ胃癌を疑いました。「多分、胃の出口に大きな癌が出ている可能性が高い。すぐに病院で検査を受けなければならない」と少し強い口調で促しました。

すぐに、近医である岩手県立千厩病院で検査を受けました。検査結果は、「胃袋の出口付近に直径5センチ位の野球ボール大の腫瘍しゅようが出ている。早く切除手術をした方がよい」ということで、そのまま入院となりました。平成29年4月5日でした。

娘さんに、「お母さんの闘病記を書きたいが、お母さんから了解を取ってもらえないか」とお願いしたら、「父も母もいいそうです」という返事が、その日のうちに返ってきました。そのみならず、『R子胃癌に関する経過』と題する平成29年8月11日付けのメモまで書いてくれました。要領よく簡潔に書かれています。手を全く加えずそのまま転記します。

- 4月5日 2週間ほど食事がとれず、岩手県立千厩病院入院
- 4月11日 胃癌と告知
- 4月19日 紹介状を依頼
- 4月24日 仙台厚生病院に転院
- 5月8日 胃3分の2切除手術
- 5月16日 腹膜転移告知
- 5月20日 仙台厚生病院退院
- 5月25日 抗ガン剤治療のため、岩手県立磐井病院受診 体重29kg
- 6月5日 免疫細胞療法のため、がんのクリニック受診 血液採取（車椅子移動、上野から池袋まではタクシー移動）
- 6月6日 磐井病院にて、ポート埋め込み術（抗がん剤注入口造設）
- 6月8日 磐井病院にて、抗ガン剤1回目（SOX療法、少量）  
翌日から指先が少し痺れる副作用出現
- 6月21日 がんのクリニックにて、免疫細胞療法（高活性化NK細胞療法）点滴1回目 副作用なし（車椅子移動、上野から池袋まではタクシー移動）
- 6月27日 この頃より、食欲回復傾向、散歩の距離・時間延びる、家事にも意欲的となる。
- 6月29日 磐井病院にて、抗ガン剤2回目（通常量）  
髪の毛が抜ける副作用出現
- 7月12日 がんのクリニックにて、免疫細胞療法点滴2回目 副作用なし（歩行移動、上野から池袋まではタクシー移動）
- 7月20日 磐井病院にて、抗ガン剤3回目の予定が、白血球数が低く、できず。
- 7月27日 がんのクリニックにて、免疫細胞療法点滴3回目 副作用なし（歩行移動、上野から池袋までは電車

移動)

- 8月3日 磐井病院にて、抗ガン剤の種類を変えて（サイラムザ+パクリタキセル療法）抗ガン剤3回目の予定が、再び白血球数が低くできず（体重31kg 6月5日より2kg増）
- 8月10日 磐井病院にて、サイラムザ+パクリタキセル療法による抗ガン剤の予定が、白血球数が少なく、サイラムザのみ施行。

娘さんの前記メモに、いくらか私が知っている範囲で補足説明を加えてみます。

4月5日の千厩病院は、初診だったのですが、その場で入院となりました。というのは、胃に食べた物が詰まっていて、苦しんでおり、それを取り出さなければならないことと、栄養が摂れていないので、点滴で栄養を補充しなければならないからです。

4月11日に胃癌の告知となったのは、細胞検査の結果、癌であることが判明したからだと思います。4月5日の時点で、胃癌とほぼ判断できたのでしょうが、慎重に検査結果を見て、告知したのでしょう。

4月19日に紹介状を依頼しました。4月11日の胃癌の告知の際、4月24日に切除手術の予定と言われたというので、それはストップし、セカンドオピニオンを受けた方がよいと、娘さんにアドバイスをしました。というのは、胃癌の切除手術は千厩病院で大丈夫だと思いましたが、癌が他に転移しているから、もっと進んだ病院の方がよいと思ったのです。娘さんはすぐ納得し、R子さんや家族を説得し、仙台厚生病院に紹介状を書いてもらいました。

いまやセカンドオピニオンは常識です。紹介状を書くように頼まれ、嫌な顔をする医師などいません。仮にいたとしたら、

そんな医者はずぐ手を切れればいいのです。医師だって、弁護士だって、誰でも同じ能力があるわけではありません。それぞれ得意な分野もあれば、不得意な分野もあります。経験の豊富な人も、経験不足の人もいます。ランクがあります。それぞれ適材適所なのです。特に病気には、どの病院を選ぶかで助かることもあり、死ぬこともあります。46年間の弁護士生活で多くの医療過誤事件を経験し、62の厄年以來、自らも患者経験をし、このことは痛感しています。

4月24日は、千厩病院の方針では、胃切除手術の予定でしたが、それは取り止め、同じ日に仙台厚生病院に転院となりました。5月8日に胃の3分の2を同病院で切除しました。ところが、5月16日になって、癌が腹膜に転移していることが告知されました。家族もがっかりしていました。

ところが、R子さんは、「残された時間の一瞬一瞬を楽しく生きるだけ」と言ったそうです。それを聞いて、私は「大丈夫だ。こういう方は助かる」と思いました。これまでそのようなポジティブな方が助かっている例を多く見てきています。

そんな思いをしていたところ、不思議なことがあるものです。私の大学の後輩で公益財団法人の理事長なども歴任している有名な弁護士が、「癌が転移し、一時仕事も、社会活動もストップしていましたが、新しい療法で体調が良くなったので、仕事も社会活動も再開します」という挨拶状をよこしてくれたのです。すぐにその療法を教えてもらいました。それは、「抗癌剤治療から、免疫細胞療法に切り替えた結果」だということでした。

生き方や

運まで変える

心かな



H17.6.30

6月5日のメモに、「免疫細胞療法のため、がんのクリニック受診」とあるのは、免疫細胞療法の初診日のことです。その後、6月21日に第1回目の免疫細胞療法がなされました。7月12日に第2回目の免疫細胞療法がなされました。7月27日に第3回目の免疫細胞療法がなされました。4回目は8月17日ですから今日ということで、R子さんは夫と2人で東京池袋の「がんのクリニック」という病院に行っています。

お父さんお母さんから電話があり、ドクターより「大変順調だ」と言われたそうです。まずは一安心です。腹膜に転移していると宣告された時は、皆、「もうダメだ」と思いましたが、ここまでくれば、「これならやれそうだ」と思うようになりました。食欲も戻りましたし、体重も増えています。歩くことも、家事も、健康な頃と同じ状態まで回復しました。本人も家族も「奇跡」だと言って、私にまで感謝してくれています。

今後の治療経過とその結果については、よく観察して、機会を見て報告したいと思います。今のところ、R子さんの場合は、抗ガン剤療法と免疫療法との併用がうまくいっているようです。やはり抗ガン剤には副作用があり、R子さんの場合にも出て来ています。免疫療法には、それがなさそうです。

治療は本来QOL（クオリティ・オブ・ライフ、生活の質）の向上を目指すものです。副作用で苦しむようでは、治療の本質に反する気がします。何度か抗ガン剤治療で苦しんだ人が、「全身麻酔に入る時に、もう意識が戻らないでほしいと思った」と語ったそうですが、分かる気がします。

私の大事なクライアント（依頼者）である会社経営者が来所した際、「時々入院し、抗ガン剤治療を受けているが、副作用がひど酷く、10階の病室の窓から飛び下りたいと思うことが度々あります」と言った時の様子が頭にこびりついていて、抗ガン剤治療は受けたくないし、受けさせたくないと思っていました。「残された時間の一瞬一瞬を楽しく生きるだけ」と言っているR子さんの気持ちを思えばなおさらです。

医師で初代厚生労働大臣だった坂口力さんは、主治医から抗ガン剤治療を行うかどうかを問われ、「私は化学療法（抗ガン剤療法）は行いません」と答えたそうです。その理由は抗ガン剤治療を行っていた恩師を見舞った際、「がんの苦しみより、薬の副作用のほうがどれだけ苦しいか」と言っているのを聞いたからだとのことでした。

治療は病気を治すことが目的であることは間違いありませんが、その副作用で患者が苦しい時間を長く続けなければならないというのは、「人生は楽しみ合うのみ」という『いなべんフィロソフィー』に反します。「治療は、QOLを上げるためだ」という考え方こそ大事ではないでしょうか。

少し位長く生きられたとしても、痛みに苦しめられる毎日より、残された人生の一瞬、一瞬を楽しむ方を私は選びます。QOLを高めるということは、そういうことだと思います。

免疫細胞療法は、まだ研究途中というところもあり、問題点がないとは言い切れませんが、2～3週間に1回病院に通い小1時間血液を採り、点滴を受けるだけで、入院の必要もなければ、痛みもなく、副作用もないというところに大きな魅力があります。日常生活が、病院ではなく家庭でできるということは嬉しいことです。問題は、今のところ健康保険が使えないため、医療費の負担が大きいという点にあります。

これに続けて、免疫療法を含め、癌の治療方法については、私の理解した範囲で説明したいと思います。癌は「早期発見、早期治療」が肝心です。早期発見の方法も私の分かる範囲で説明したいと思います。私は、平成23（2011）年12月12日に、直腸癌切除手術を受け、人工肛門造設手術の体験もあります。多くの癌患者も見て来ました。これまで私が癌に対し抱いてきた私個人としての思い込み、つまり「癌私感」も紹介したいと思います。

